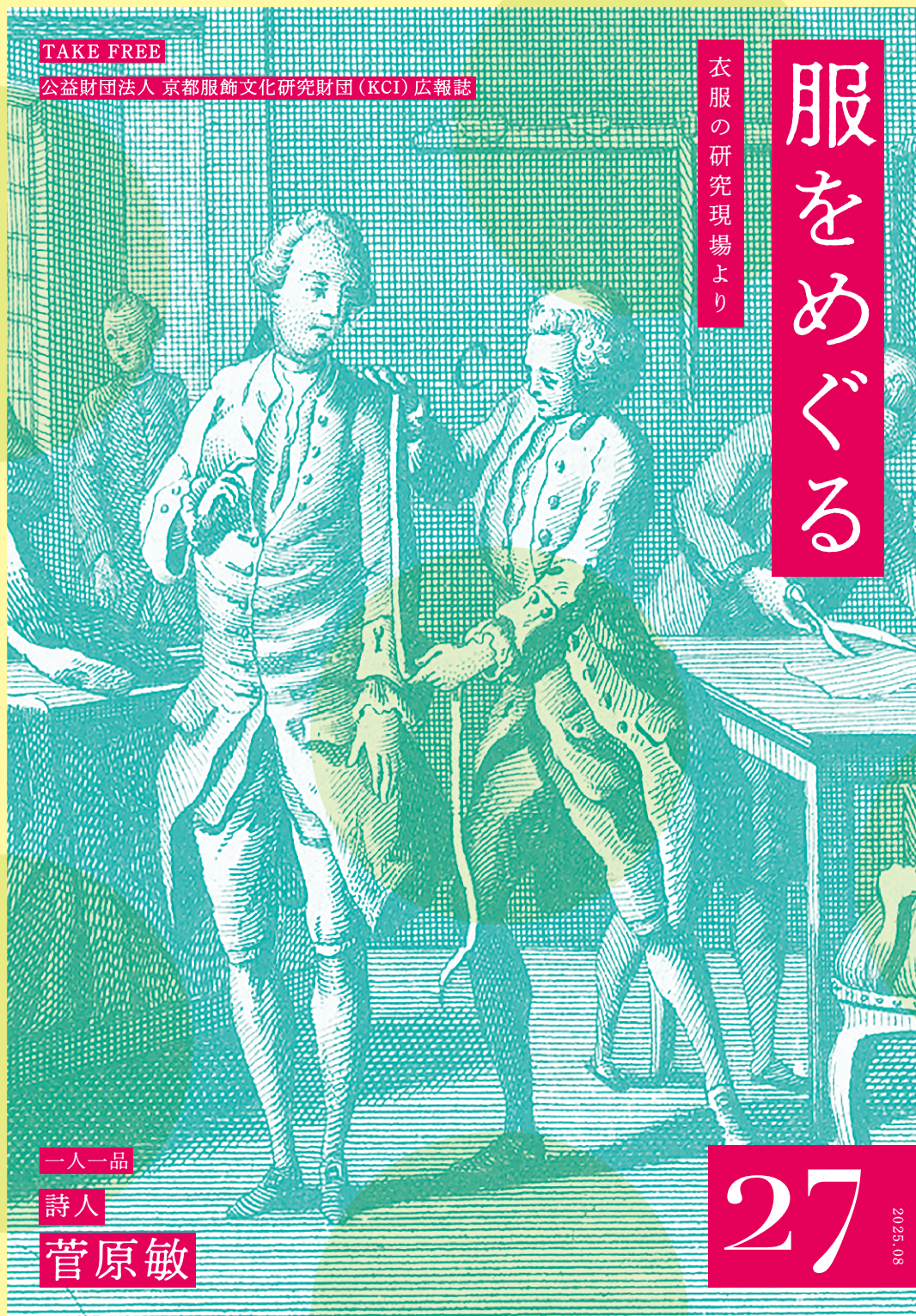


TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI) 広報誌

衣服の研究現場より

服をめぐる



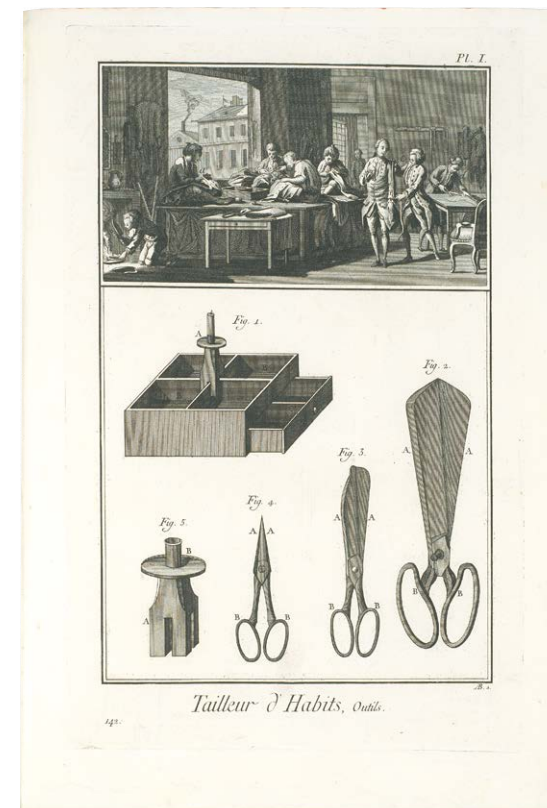
一人一品

詩人

菅原敏

27

2025.08



ディドロ、ダランベール編集
『百科全書、あるいは科学、技術と工芸の理論的辞書』
(*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*)より

「服の仕立屋」

1770-78年 京都服飾文化研究財団所蔵

本書は人文科学、自然科学、応用科学など諸事象における約6万項目が収録された百科事典です。18世紀フランスの啓蒙思想の集大成として刊行された本書は、啓蒙思想家ドゥニ・ディドロとジャン・ル・ロン・ダランベールを中心に、モンテスキューやルソー、ヴォルテールといった著名な哲学者も執筆に携わり、20年以上かけて編纂されました。本巻(文字頁)17巻と図版集11巻で構成され、図版は細かく彫られた銅版画で表現されています。これらのなかには服飾に関する項目も多く、この頁では男性服の仕立ての様子と道具類が紹介されています。上図では、職人たちが生地のカットや縫製、採寸を行っている様子がうかがえます。また、下図には用途別のハサミ3種、針や糸、ボタンを収納する燭台付き箱が示されています。

服をめぐる 27

一人一品

詩人×KCI

菅原敏「星のための型紙」 p4

KCI Wunderkammer

オーバースリーブ p12

地産街道を行く27

フランス漆ものがたり(前編) p14

今日の補修室 第27回

衣装展示の舞台裏① p20

「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展
閉幕のご報告 p22

お知らせ p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展、「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌「Fashion Talks...」の発行を通じて公開しています。

Website <https://www.kci.or.jp/>

Follow us !!



京都服飾文化研究財団
公式Instagram

@thekyotocostumeinstitute



「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展

Chapter 5

「我を忘りたい」

東京オペラシティ アートギャラリー

2025年4月16日～6月22日

高橋健治撮影

本展の内容は以下をご覧ください

<https://www.kci.or.jp/love/highlights.html>



一人一品 詩人 × KCI

菅原敏

Bin Sugawara

著名人がそれぞれの視点でKCIの収蔵品に向き合い、その魅力を語る企画「一人一品」。

今回のゲストは、本誌二度目のご登場となる詩人・菅原敏さんです。

菅原敏さんは2011年、アメリカの出版社PREPOSTより詩集『裸でベランダ／ウサギと女たち』を発表しデビュー。以来、文芸誌や新聞・雑誌への寄稿をはじめ、毎夜一編の詩を街に注ぐラジオ番組組「at home QUIET POETRY」(J-WAVE)のナビゲーターのほか、Superflyへの歌詞提供、国内外ブランドとのコラボレーション、ギャラリーや美術館での展示、欧米やロシアでの朗読公演など、多様なかたちで詩の世界を表現し続けています。音楽やアートなど異分野との協働にも意欲的に取り組まれており、その活動は多岐にわたります。近著に『かの一と超訳世界恋愛詩集』(東京新聞)、『季節を脱いでふたりは潜る』(雷鳥社)、最新刊『珈琲夜船』(雷鳥社)。

今回は、東京オペラシティアートギャラリーで開催されたKCIの大規模展『LOVE ファッション—私を着がえるとき』(2025年4月16日～6月22日)を訪れた際の印象をもとに、詩を寄せていただきました。なかでも、現代のデザイナーやアーティストによる作品が立ち並ぶ展示エリアに、特に強い印象を受けられたようです。さて、菅原さんの目に映ったその風景から、いったいどのような詩が生まれたのでしょうか。

星のための型紙

菅原敏

花をまとい
獣をまとい
鉄をまとい
都市をまとい
星々をまとう



全ての祈りを人型に切り抜き
身にまとうことができたなら
重なる音と言葉が脈を打ち
生きれば生きるほど
その袖は血を通わせる





花々は草原で

獣たちは森の奥で

鉄の甲冑は朽ち果てた戦場で
踊るだろう

やどかりたちは海の底で

星々は遙か彼方で

かすかに煌めくだろう

そして音楽が終わったとき

倒れ伏した私は裸で目を覚ます





袖を通すことは夢を見ること
 我を忘れるほど私に会おうこと
 指先から足の先まで
 この世界のすべてを着たい
 一枚一枚羽織ることに
 だんだんと膨らんで
 この体が星の大きさに
 なるまで私は





参考：『Le Mercure des Salons』誌（1830年）より
京都服飾文化研究財団所蔵

オーバースリーブ

素材：綿 原産地：欧州
製作年：1830年頃
京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

チュール地に細かな刺繍が施された一対の袖。これは作りかけの服の一部でも、後に取り外されたものでもない。れっきとしたファッション・アイテムだ。1820年代後半から30年代にかけて、流行の女性服の袖はもりもりと膨らんだ。袖の下にはクッション状のスリーブパットを仕込むなどして袖がしぼむのを防いだ。しかしそれだけでは飽き足らず、服を着装する際に袖の上からこのような袖を付けて、さらに膨らみを強調したのだった。袖コンシャスな時代の、まさに盛りアイテム！（筒井）



珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

——そこはまさに「驚異の部屋」。

フランス漆ものがたり（前編）

今回の「地産街道を行く」は、10月11日より三菱一号館美術館で開催される「アール・デコとモッドー京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションを中心」に「展に関連して、1920〜30年代のパリで活躍した工芸家ジャン・デュナン(Jean Dunand, 1877年-1942年)のKCI所蔵作品とその時代の装飾芸術について、早稲田大学 社会科学総合学院教授の朝倉三枝先生にお話を伺いました。

工芸家ジャン・デュナンとは

KCI 本日は、1920年代を中心に、近現代フランスの服飾と美術をご専門にされている朝倉先生をお迎えし、工芸家ジャン・デュナンの活動を中心にお話を伺いたいと思います。

朝倉 どうぞよろしくお願ひいたします。

KCI お話のきっかけとして、こちらにご用意したのが、KCIが所蔵している1925年頃のバックルやコンパクトケース(上図)です。これはジャン・デュナンが制作したもので、デザインや質感には1920年代のアール・デコの美学がよく表れてい



KCI収蔵品

ジャン・デュナン バックル(中下) コンパクトケース(中上)(左)(右)

1925年頃
京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影
金属に黒や赤、金を混ぜた漆が均一に塗られている。コンパクトケースには卵の殻を砕いた卵殻技法が使われ、それぞれに異なる文様と質感が表現されている。



早稲田大学教授、朝倉三枝先生



ジャン・デュナンの肖像
『Vogue(フランス版)』1925年5月1日号より

ます。それぞれ金属の上に漆を塗ったものですが、この作品を作ったジャン・デュナンとは、どのような人物だったのでしょうか。

朝倉 ジャン・デュナンはフランスで活躍した工芸家ですが、もともとはスイスの生まれです。ジュネーブの産業芸術学校で学んだのち、1897年にパリにやってきました。そこで彫刻家ジャン・ダン(Jean Dampé)という人物に師事します。

KCI 初めは彫刻を志していたのですか。

朝倉 はい。ただ、ダンは当時パリで盛んだったアール・ヌーヴォーの美学をベースにした「ラール・ダン・トゥ(Jean Dunand)」というグループに所属していました。建築家や画家、陶芸家、彫刻家などが集い結成されたこのグループは、生活に関わるあらゆる領域にアートを取り入れようと、新しい家具やインテリアの創造を目指していました。

KCI なるほど、師匠のダンは彫刻にとどまらず、幅広い領域で活躍していたのですか。

朝倉 はい。デュナンはダンのもとで学び、時にその仕事を手伝うなかで次第に装飾芸術への関心を育んでいくこととなります。

KCI 19世紀後半に起こった「アーツ・アンド・クラフツ運動」は、生活の中に芸術を取り入れようと、多くの芸術家が参画し、やがてアール・ヌーヴォーという大きな潮流へとつながっていきました。デュナンも、まさにその流れの中で若き日を過ごしたのですか。

朝倉 そうですね。デュナンは多方面に関心を持つタイプ

細かく砕いた卵の殻が、小さなケースに繊細かつ軽やかな雰囲気を与えている。



KCI 収蔵品

ジャンヌ・ランパン イヴニング・ドレス

1928年夏

京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影

赤と金色の縞リボンをストライプ状にアップリケしたベルトが印象的なドレス。日本の装いに関心を寄せたランパンは、着物の帯にも見えるこうした日本的な要素を度々デザインに取り入れた。



金属に漆を塗るという、デュナンならではの手法で作られたコンパクトケース。なかには3つに仕切られており、それぞれの蓋がぴったりと閉まる丁寧な作りになっている。

だったようです。休暇で故郷スイスに戻った際には、ジュネーブの金工職人のもとで、ベルギー発祥の伝統技法「ディナンドリー (dinanderie)」を学んでいます。これは真鍮を素材とした工芸技術で、彼は鍍金や浮彫装飾など、さまざまな技術を身につけていき、金工作家としても活動を始めます。

KCI 先ほどご紹介したKCI所蔵のコンパクトケース類も金属製でした。スイスで学んだ技術が、まさにそこに活かされているのでしょうか。ところで、彫刻から出発し、室内装飾の現場で経験を積み、さらには金工作家として活動していたデュナンは、どのようにして漆と出会ったのでしょうか？

朝倉 詳細は不明ですが、デュナンが1923年に受けたインタビューで語ったところによると、ある時、デュナンの工房に日本製の銅製の壺の修理依頼が舞い込んだそうです。その壺を見たデュナンは、表面に塗られた透明な漆が、深みと独特の輝きを与えていることに気づきました。それが、彼と漆との最初の出会いです。

KCI 漆の文化はアジア発祥で、16世紀以降に西洋にもたらされましたが、完成品を輸入するばかりで生産には関わっていませんでした。デュナンはその技法を日本人の漆芸家から直接、学んだと伺いました。

朝倉 はい。菅原精造という人物です。東京美術学校の漆工科で学んでいた菅原は、同校で師事していた辻村松華(延太郎)が、パリの宝飾工房「ガイヤール」から招聘されたのを機に、1905年に随行してフランスへ渡りました。その後、日

本に戻ることもなくパリにとどまった菅原は、家具デザイナーのアイリーン・グレイにも漆の技を伝授し、アール・デコ期に漆のインテリアで一世を風靡した彼女の漆制作に協力をしました。長らくその存在は忘れられていましたが、近年の研究により、彼が1920年代のヨーロッパの芸術家たちに与えた影響の大きさが明らかになってきています。

KCI その菅原からデュナンはどのように漆の技法を学んだのか記録が残っているんですか？

朝倉 はい。1912年5月16日に最初のレッスンを受け、7月までの間に全13回の指導を受けたようです。デュナンは非常に熱心に学んでおり、小さなノートに教わった内容をびっしりと書き留めています。

KCI そうして、彼は漆芸の活動を本格化させていくわけですね。

デュナンの漆芸とその時代の美学

KCI さて、デュナンが注目を浴び始めたのは1920年代のパリです。この頃、後に「アール・デコ」と呼ばれる装飾様式が広がっていました。先ほどご紹介した、デュナンのコンパクトケース類にも、このアール・デコの影響は見て取れるのでしょうか？

朝倉 はい。まず特徴的なのは、無駄をそぎ落とした直線的で幾何学的なフォルムです。また、黒・赤・金といった、明確な色



KCI 収蔵品

ジャン・デュナン マドレーヌ・ヴィオネの 肖像画のための習作

1932年

京都服飾文化研究財団所蔵 来田猛撮影

デッサンを撮影した紙焼き写真のうえに漆で着色した、
肖像画のための習作。縦23cm×横15.4cm。

◀油彩画のように、漆に厚みをも
たせたり色調を変えるなどして、
絵画的表現が試みられている。



合いの組み合わせにも、アール・デコらしい美学が感じられます。

KCI KCIが所蔵しているジャンヌ・ランバンによる1928年のイヴニング・ドレス(17頁)にも、同様の特徴が見られます。黒い絹タフタ製で、ベルトには赤と金の絹リボンをストライプ状に縫い留めており、デュナンの作品と通じる美意識を感じさせます。

朝倉 デュナンの作品やランバンのドレスにも見られるように、アール・デコの装飾にしばしば特徴的なのが、きらめきや艶感のある質感です。

KCI そういう意味では、つややかに光る漆はまさに理想的な素材ですね。

朝倉 そうですね。加えて、1920年代はサメ皮や象牙といった、エキゾチックな素材が流行した時代でもあります。そうした中で、東洋の素材である漆もまた、モダンでファッショナブルなものとして注目され、受け入れられていたのではないかと思います。

デュナンによる肖像画制作と服飾デザイナー

KCI そして、もう一つご紹介したいKCIの収蔵品が、ジャン・デュナンによる《マドレーヌ・ヴィオネの肖像画のための習作》(1932年、上図)です。1929年、パリ16区の高級住宅街に新居を構えた服飾デザイナーのマドレーヌ・ヴィオネは、その室内装飾をデュナンに依頼しました。本作

は、その客間に掛けるための肖像画の習作にあたります。デッサン画を接写した紙焼き写真のうえに漆で直接彩色を施しており、デュナンが肖像画制作に取り組む過程を知ることができます。たいへん貴重な資料です。彼は漆を用いた肖像画を数多く手がけていますが、この作品のように直接写真に漆を試した例は珍しいと言えます。

朝倉 デュナンの肖像画は非常に特徴的ですよね。漆の質感に加え、「卵殻技法」と呼ばれる装飾(卵の殻を細かく砕いて貼りつける手法)が大きな魅力です。

KCI 今回ご紹介した習作でも、完成版では髪の部分に卵殻技法が用いられていたそうです。

朝倉 また、デュナンはヴィオネ以外にも、ランバンやエルザ・スキヤパレリ、ルイズ・ブーランジェといった服飾デザイナー、そして後ほどお話しする帽子デザイナーのマダム・アニエスから肖像画の注文を受けています。

KCI デュナンと服飾デザイナーたちとの接点は、まさにこうした依頼から始まったのかもしれないですね。次号(2026年2月発行予定)ではデュナンと服飾デザイナーとの協業やデュナンが関わったテキスタイルデザインについて詳しくお伺いしようと思います。

朝倉 次回も収蔵品が見られるのを楽しみにしています。

聞き手・筒井直子



step 07

最後にカッターをつけて、完成!

step 06

ストマッカー(胸当て)をピンで留めつけ、アンガジャント(袖口レース)、ネックレス、ブローチ、プレスレットをつけます。



step 05

肩部分の生地が劣化がみられるため、慎重にマネキンの腕を通してローブを着せていきます。ベチコートとローブの長さのバランスや横張りの具合などを確認します。生地に負荷がかかっていないか、引っ張られていないかなどに気を付けます。



ローブ・ア・ラ・フランセーズ

1775年 京都服飾文化研究財団所蔵

今回は、補修室が担う仕事のひとつ、衣装のマネキン着装についてご紹介します。2024年秋より京都、熊本、東京を巡回した展覧会「LOVE ファッションー私を着がえるとき」に出展した18世紀の宮廷用ドレス「ローブ・ア・ラ・フランセーズ」(1775年)の事例です。

衣装をマネキンに着装して展示する際は、その当時の流行のシルエットや雰囲気を再現することが重要ですが、同時に衣装の劣化や、劣化箇所へのさらなる負荷が問題となります。展示と保存、それぞれの目的の間には常にジレンマをはらんでいるのです。そのなかで衣装への負荷が少なく美しく見える着装方法を日々試行錯誤しています。

(寺川 茜)

今日の補修室

第 27 回

衣装展示の舞台裏①

衣装のマネキン着装の実例をご紹介します



step 03

さらにチュールやクッションを重ねつけて、適切なボリュームに調整します。土台をしっかりとつくるのが美的にも保存的にも重要です。



step 01

18世紀の女性の体型を模したマネキンを準備します。



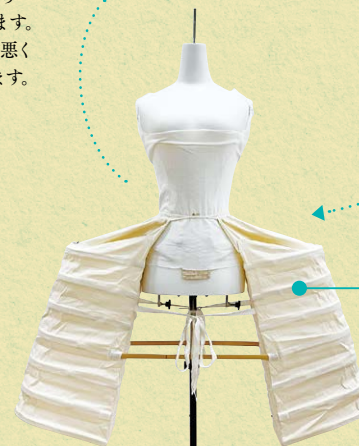
step 04

土台が完成したらベチコートを着せます。左右のバランスが悪くないかを確認します。



step 02

補修室が制作したパニエは、この時代には特徴的な横張りシルエットを再現するのに役立ちます。



Message

展覧会の閉幕にあたり、本展とともに企画した三館の担当キュレーターより、
長い旅を振り返るあたたかなメッセージをお寄せいただきました！
ぜひあわせてご覧ください。

KYOTO

京都会場

京都国立近代美術館

2024年9月13日(金)～11月24日(日)

前回の『ドレス・コード』展に続いて、同じメンバーで今回の企画をかたちにできたことをとても嬉しく思います。結果的にコロナ禍をはさむ長期プロジェクトになり、まるで長編映画を二本撮り終えたかのような達成感と充実感があります。楽しかったです！



牧口千夏

(京都国立近代美術館 主任研究員)



©京都服飾文化研究財団、
福永一夫撮影



熊本市現代美術館

2024年12月21日(土)～2025年3月2日(日)

1970年代からKCIがつくりあげてきたファッション展の歴史に参加できて光栄でした。服を見せるだけではなく、服を着る現代の私たちに焦点を当てた企画展。ファッションを通じて多くのことを話し合う機会は、とても刺激的で楽しい時間でした。これからのKCIの展覧会にも期待しています！



池澤茉莉

(元熊本市現代美術館 主任学芸員)

熊本会場

KUMAMOTO



©KCI

山中慎太郎(Qyumi)撮影

TOKYO

東京会場

東京オペラシティ アートギャラリー

2025年4月16日(水)～6月22日(日)

前回はコロナ禍の緊急事態宣言により、展示作業の中断、会期の順延、来場制限を余儀なくされました。今回は企画から展示まで走り抜けられたこと、とても嬉しく思います！同じメンバーで企画するという貴重な機会を得られて、思い出深い展覧会となりました。ありがとうございました。



福島直

(東京オペラシティ アートギャラリー キュレーター)

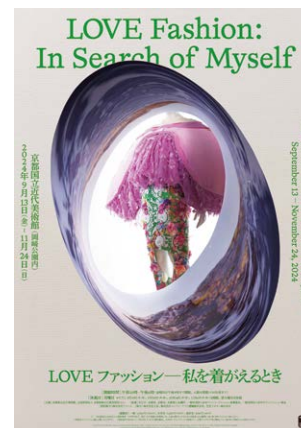


高橋健治撮影

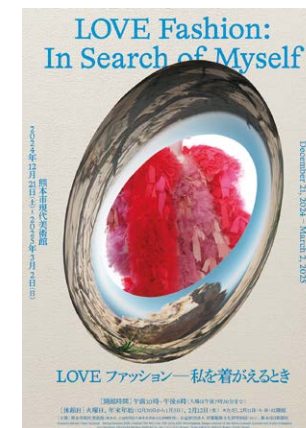
「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展

が閉幕しました

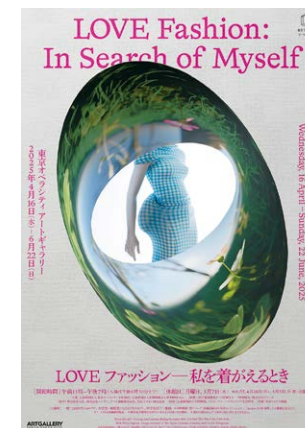
京都服飾文化研究財団は、京都国立近代美術館、熊本市現代美術館、東京オペラシティ アートギャラリーの三館と共に、展覧会「LOVE ファッション—私を着がえるとき」を開催いたしました。2024年9月に開幕した本展は、三会場を巡回するなかで延べ8万1千人の来場者を迎え、2025年6月、最終会場である東京での会期をもって閉幕いたしました。本展では、ファッションとアートの両側面から「装う私」を見つめることをテーマに掲げ、国内外のデザイナーやアーティストによる衣装作品や美術作品などを紹介しました。ファッションがいかに「私自身」をかたちづくり、ときに揺さぶるのかを問いかける展示構成は、多くの関心と反響を呼ぶこととなりました。各会場では、来場者が自身の経験と重ね合わせながら作品と向き合う姿が印象的でした。本展の実現にあたり、多大なるご尽力を賜りました関係者の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。



京都会場ポスター



熊本会場ポスター



東京会場ポスター

100年前のモードを一挙公開!

展覧会

「アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団(KCI) コレクションを中心に」 開催!

2025年はバリで開催された装飾芸術の博覧会、通称「アール・デコ博覧会」から100年目の記念年です。KCIは、これまで収集してきたアール・デコ期の服飾作品から約200点を厳選し、本展覧会で一挙公開します。また、国内外の美術館・博物館や個人所蔵の絵画、版画、工芸品などを加え合計約310点により、現代にも影響を与え続ける100年前の「モード」を紐解きます。ぜひ会場へお越しください!



展覧会 WEB サイトは
こちら!

<http://mimt.jp/ex/artdeco2025/>



会期 2025年10月11日(土) ~ 2026年1月25日(日)

会場 三菱一号館美術館(東京・丸の内)

主催 三菱一号館美術館、公益財団法人 京都服飾文化研究財団

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第27号
2025年8月31日発行

発行

公益財団法人 京都服飾文化研究財団(KCI)
〒600-8864
京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
株式会社ワコール京都ビル内
電話: 075-321-9221
ウェブサイト: <https://www.kci.or.jp/>

編集: 筒井直子、福岡英城、五十枝亙、木下ミルチ
(京都服飾文化研究財団)

デザイン: 坂田佐武郎、桶川真由子、川口芽依(Neki inc.)
写真: 成田舞(Neki inc.)



本誌バックナンバーはこちら

<https://www.kci.or.jp/publication/public-relations-magazine/>

KCIの出版活動から

研究誌『Fashion Talks...』のご紹介

KCIでは、研究誌『Fashion Talks...』を年に一度刊行しています。多様な分野の研究者による寄稿や、国内外の展覧会レビューを通して、研究対象としてのファッションの深化と広がりを目指す誌面づくりに取り組んでいます。KCIの収集や展覧会活動とも連動しながら、ファッションにかかわる問いを読者とともに考え、その背後にひそむ社会や時代に目を向けます。次号vol.17「キュレーション」は今冬刊行予定です。こちらも併せてぜひご覧ください。

研究誌『Fashion Talks...』の
詳細はこちら

<https://www.kci.or.jp/publication/research-journal/>

